宮沢賢治が技師として働いた町 一関市東山町

～「石っこ賢さん」と東北砕石工場～

石と賢治のミュージアム 館長 菅原 淳

1. はじめに

宮沢賢治については多くの方々がその作品や生き方に関して論考されている。37歳という若さでこの世を去り、生前出版した本は2冊（詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』）、手にした稿料は『雪渡り』という作品での5円だけだったことを知るとほとんどの人がこの事実に驚く。

宮沢賢治をよく知らない若い人でも『雨ニモマケズ』は知っている。この『雨ニモマケズ』が宮沢賢治の死後、仕事で使用していたトランクのポケットから見つかった手帳に書かれていたことはご存じだろうか。自分から世に出したわけでないこの作品が人々の心を捉え、長い時を経た今日も多くの日本人の心に刻まれているのはなぜだろう？更に【世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない】【永久の未完成これ完成である】等、誰もが一度は聞いた言葉であろうこれらの言葉を残した宮沢賢治はどんな人なのだろう？賢治に魅せられた人は老若男女を問わずみなさんがそのような“なぜ？”という思いを抱き、賢治の足跡を訪ねてみたくなる。

かくいう私自身も理系を自称し、文学に対する興味が薄かった人間の一人です。今年の春までは、宮沢賢治については数々の作品を残した有名な人で、農民の為に尽くした人、【あらゆることを自分を勘定に入れず・・・】と書けるなんてすごい人だな・・という程度の知識しか持ち合わせていませんでした。

今春この一関市東山町に来て、町の入口に掲げられた【グスコーブドリのまち　東山】の看板を見て、周囲の皆さんの宮沢賢治に寄せる思いを聞いて、様々なイベントを経験させていただき、賢治の人となりを知ることとなりました。そして今、亡くなってから80年以上を経て尚こんなに多くの人を引き付ける魅力にあふれた人間宮沢賢治を更に知りたいと思っています。

この機会に若い方々をはじめとする多くの方々に宮沢賢治を知ってもらおうということで、『雨ニモマケズ』を書いた詩人、『銀河鉄道の夜』などを書いた童話作家、花巻農学校で教えていた教師、『星めぐりの歌』などを創った音楽家等、一つの枠に括ることが出来ない多くの分野で足跡を残した宮沢賢治について書いてみたい。その中でも特にその宮沢賢治が『石っこ賢さん』と呼ばれていた子供時代のこと、地質調査で岩手の多くの地を歩きその作品の中に鉱物や化石を登場させたことに触れ、後半では晩年東北砕石工場の技師として働いたこと、そしてその工場の在る町岩手県一関市東山町とのかかわりについてふれてみたい。

林風舎

2.『石っこ賢さん』（小学生～中学生）

宮沢賢治は明治29年（1896年）8月27日岩手県稗貫郡里川口村川口町（現花巻市豊沢町）で父・宮沢政次郎、母・イチの長男として生まれた。家業は質屋・古着商を営んでおり、地域では大変なお金持ちでした。しかしながら貧しい人々を相手にお金を得ることに違和感を持ち、そのことを悩んでいたと伝わっている。

花巻川口尋常小学校（のち花城小学校と改名）に入学。礼儀正しく、言葉遣いも丁寧だったそうです。そんな賢治は小学校高学年のころ、野山を歩き、石をハンマー

でたたき、その石の中にどんな鉱物が入っているか丹念に調べることに夢中になり、周囲の人達から『石っこ賢さん』というあだ名を付けられました。何億年も前からの地球の活動で地中に埋もれていた鉱物や化石に思いをはせていたようだ。また植物や昆虫採集にも凝っていたことが伝わっており、何事にも熱中する少年だったようである。このような性格がのちに広い分野にわたる活躍に繋がっている。

少年期の賢治は、花巻市豊沢川渓畔の大沢温泉における夏期仏教講習会に毎年夏に家族とともに訪れていた。これは夏期仏教講習会の運営に父政次郎がかかわっていたからであり、9歳の頃からわかっているだけで4回参加している。中学入学後も友人たちと訪れ、水車を使う湯をくみ上げる部分をいたずらし、湯船に直に濁流の砂利をつぎ込むという本人曰く「大事件」を起こし、友人に手紙で報告している。そんな側面を持った少年でもあった。

岩手県立盛岡中学校（現･盛岡第一高校）に入学し、親元を離れ寄宿舎生活をしたが、鉱物採集は中学生になっても続き、生涯鉱物や地質と関わっていくこととなった。また、中学校2年生の時に初めて岩手山に登り、その後先輩や友人と岩手山や早池峰山に何回となく登った記録が残っている。体が弱い賢治というイメージがあるが、こと歩くことに関しては特別な能力を持ち盛岡から花巻まで40km以上歩いた記録が残っています。このように岩手の多くの自然に親しんだことが、後年岩手をイーハトーブと命名し、みんなの理想を追い求める地として様々な作品に登場させた大きな要因になったことは確かである。宮沢賢治の文学作品には多くの鉱物、岩石、化石が登場し、その作品の特徴でもあり魅力となって読者をひきつける要素となっている。その例を挙げるならば『十力の金剛石』や『楢ノ木大学士の野宿』等の作品がある。

3. 盛岡高等農林学校から羅須地人協会時代

今回のテーマでは大きく触れないが、やはりこの時代の宮沢賢治について簡単に紹介をさせていただく。

＊盛岡高等農林学校時代

中学卒業後は更に勉強をしたい賢治と家業を継いでほしい父は対立することが多かったようであるが、最終的には父の了解を得て一年後に盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）に首席入学を果たした。そして土壌学を専門とする関豊太郎教授の指導を受け、本格的な地質調査にも従事した。この関教授は冷害克服、土壌学研究、土壌改良にかけた当代一の学者で賢治のその後の人生に大きな影響を与えた。またこの学生時代にも、土日は登山、鉱物標本採集を継続的にこなしたようである。大正6年には保阪嘉内、小菅健吉、川本義行等と同人誌『アザリア』を刊行して短歌・小文などを発表、翌年6月まで6冊を発行した。大正7年3月に卒業し同学の研究生となる。卒業後徴兵検査を受けたが第二乙種合格で兵役は課せられなかった。この当時から童話の創作を開始したようである。大正8年には日本女子大学校生の妹トシが病気となり、母とともに東京でトシの看病を行う。この間に東京で人造宝石の製造販売事業を計画するも父の反対にあって断念している。

＊国柱会～稗貫郡立稗貫農学校
（のちの　県立花巻農学校）教諭

大正9年研究生を卒業、関教授から助教授推薦の話があったがそれを辞退。10月には国柱会に入信、自宅で店番などをしながら、信仰や職業について父と争うことが多くなった。友人保阪嘉内にも国柱会への入信を薦めたが決裂。翌年家族に無断で上京して国柱会を訪問、筆耕の仕事をしながら街頭布教や奉仕活動を行った。

雑誌『愛国婦人』に童話『雪渡り』を発表して稿料５円を得たが、これは生前唯一の稿料となった。その後トシの発病の為花巻に戻ることとなり、この当時に書き溜めた作品を持って帰郷することになった。

11 月には稗貫農学校（のち花巻農学校；現在の花巻農業高等学校）の教諭になった。土壌・肥料などの担当科目を教えながら、学生の為「精神歌」などの作成、田園劇の上演など多方面にわたる活動を積極的に行った。しかしながら学校教育と現実の農民の苦しみの違いに限界を感じるようになり、《本当の百姓になり働く》との決意で大正１５年春教師を依願退職した。

教師時代の最大の出来事は妹トシの死去で、賢治は大きな衝撃を受けしばらく筆をおいたり、筆を取ったのちも当時書いていた《心象スケッチ》では「オホーツク挽歌」などの追悼の詩を残している。この花巻農学校時代は賢治の生涯の中でも最も創作をした時期であり大正１３年には生前に刊行された唯一の詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』を自費出版している。また《ドリームランドとしての岩手県》すなわち《イーハトーブ》を書いた時期でもある。

＊羅須地人協会

大正 15 年春、花巻農学校を退職する前に花巻農学校に開設された岩手国民高等学校で【農民芸術論】を講じた。この講義を発展深化させ、まとめたのが【農民芸術概論】である。これが羅須地人協会の思想的な基盤となった。

賢治は花巻町下根子桜の宮沢家別宅で独居生活を開始、羅須地人協会の設立は８月頃で農学校の教え子や近隣の青年達とともに始まった。（この場所は現在雨ニモマケズ詩碑が建てられ、命日の９月 21 日には賢治祭が行われる場所になっている）開墾や音楽の練習、レコードコンサートを始め、町内や近郊に無料肥料設計事務所を設け、相談や設計を始めた。その合間を縫ってオルガン・チェロの練習やエスペラント語の学習などに取り組んだ。昭和２年１月に岩手日報に“農村文化の創造に努む”との記事が出て社会主義運動との関係を疑われ警察の事情聴取を受ける。そのような中でも肥料講演・相談・設計の仕事を継続し、この間約 2,000 枚もの肥料設計図を書いたといわれている。昭和３年夏には農業指導の過労から病臥することとなり秋には急性肺炎を発症し、その後約２年間の実家での療養生活を送ることになった。

4. 東北砕石工場鈴木東蔵との出会い

実家での療養生活時代の昭和４年春、宮沢賢治の自宅を訪ねた人物がいた。当時の東磐井郡の陸中松川駅前にある東北砕石工場の工場主である鈴木東蔵であった。

まず鈴木東蔵なる人物について紹介する。明治 24 年東磐井郡東山町で農家の長男として生まれた。小規模な農家だったため決してゆとりのある家計ではなかった。このような環境の中で東蔵は小さい時から向学心に燃えて勉強する子供であったと伝わっている。何とか学問や知識技能を身につけようと当時の義務教育年限尋常小学校四年制を卒業後、補修科二年生を卒業、尋常高等小学校二年制を卒業、その後尾崎行雄が会長である大日本国民中学会（通信教育）に入会、一方で長坂村役場の用務員として採用され、働きながら学ぶという環境に身を置いた。更にこの間に長坂尋常高等小学校で一年間夜学の講習科も受講するなどたゆまぬ努力の人であったようだ。この努力する姿が上司の目に留まり、明治 40 年長坂村役場書記を任命され役場職員としての活動を開始、わずか 16 歳のころです。このような環境の中で村の若者たちと村の産業振興の有り方や、青年活動のあり方等を話し合ったり、学習会を開いたりしていた。そしてその考えを積極的に新聞等に次々

と発表した。岩手毎日新聞に掲載されたものはのちに『農民救済の理論及び実際』『理想郷の創造』となって出版されている。貧しい農民を救うための方法を追い求めた彼は【彼等は去年のために今年働き、昨日のために今日働く】という貧しい生活や借金に苦しむ農村の人々の様子や嘆きを書き残している。また東蔵は農業振興のために動力耕作機を製作しようとしたが、役場の仕事の合間にこのようなことに取り組むことに対する批判や非難を受けた。この為、東蔵は大正１１年 31 歳で役場職員を退職した。

その後雑誌記者などをしていた東蔵は地域の産業振興の鍵はこの地方に豊富に埋蔵されている地下資源である多くの種類の石材を活用することだと思い立ちました。

この中で大きな役割を果たしたのが岩手県盛岡市郊外にある小岩井農場です。小岩井農場は開場当初から酸性土壌の改良が大きな課題であり、その中和に消石灰を使用していたが、効果の持続性という点で問題を抱えていた。大正十年ころ場主である岩崎久弥が専門誌から米国では石灰石を細粉して使用しているという情報を得て試みることとした。しかしながら当時近場で石灰細粉は入手することが出来なく、やむを得ず石灰工場の屑石などを買い入れて使用していた。そのため石灰の細粉設備の購入を検討していたちょうどそのころ岩手県南の石灰石の細粉供給を請け負う業者が現れた。この業者が東北砕石工場である。

鈴木東蔵の叔父にあたる鈴木貞三郎がその弟で小岩井農場で働いていた川村貞助（旧姓鈴木貞助）を訪ねたところ、広大な小岩井の農地に白い粉を散布しているのを見て何かと質問すると“あれは石灰というもので八戸で出来たものだ。あの粉は、猊鼻渓（東山の名勝地）の岩石と同じものでそれを砕いて粉にしたものだ”と言ったそうである。それを聞いた貞三郎は驚き“小岩井ではその粉を買ってくれるのか？”と確認したそうです。貞助は“これからは農業で多く使われるだろうし、小岩井でも買うだろう”と答えた。これを聞いた貞三郎は東山に戻り早速東蔵に話を持ち掛け、東蔵はこれこそ千載一遇の機会と貞三郎に起業を奨めたのであった。

こうして二人は大正 13 年春東北砕石工場を創業した。ちょうどそのころ大船渡線を一関から摺沢まで通す鉄道工事が進行中で、開業予定の大正 14 年 7 月に合わせて 13 年から陸中松川駅から近い場所に工場を作り、小岩井農場に石灰細粉を届ける仕事に着手した。その後小岩井農場以外からの注文がほとんどないことから、そのころ一般的でなかった石灰石を砕く装置への積極的な設備投資を行なった。その後酸性土壌の改善に対する石灰細粉の効果が徐々に知られるようになり、昭和 2 年から 3 年にかけ生産は上昇していった。

そのころ一般販売店からとして花巻の渡辺嘉七肥料商店（通称：渡嘉商店）から注文があった。ところが昭和 4 年には全く注文が入ってこなかったため東蔵は花巻を訪れた。そこで花巻には肥料の神様と呼ばれる宮沢賢治という人物がおり、農民を相手に肥料相談に応じて特に石灰石粉による土壌改良が必要であることを指導していたことを知る。そして注文が途絶えたわけはその宮沢賢治が病気で臥せていたためと分かった。このことを知った東蔵は住所を聞き、宮沢賢治の家を訪ねた。

賢治は面会謝絶中であったが、父政次郎が現れ「賢治は 5 分間会いたいと云っています」と部屋に案内された。この時の二人の様子は様々な方々が書かれているが、東蔵は石灰石事業を起こした理由や役場職員時代のことを話し、賢治は石灰の効用を熱心に話し、お互いにだんだん話が弾み、対談は2時間にも及んだとのことである。

賢治さんの弟宮沢清六さんの著書『兄のトランク』によると「昭和 4 年の春、朴訥

そうな人が私の店に来て病床の兄に会いたいというので二階に通したが、この人は鈴木東蔵という方で、石灰岩を粉砕して肥料をつくる東北砕石工場主であった。兄はこの人と話しているうちに、全くこの人が好きになってしまったのであった。・・」。

農民救済、農村振興という共通の夢を持つ二人が、石灰石の活用で酸性土壌を改良し農民の生活を少しでもよくしようという共通のテーマを目の前にして、おのずと心と心が通じ合い、お互いに同志を得たという気持ちを持った瞬間であっただろう。

5. 賢治、東北砕石工場技師誕生

初めてお互いの存在を知った二人の相互連絡は、電話もなかった時代なので実際に訪問するか手紙などによる方法しかありませんでした。その中で、東蔵が販売促進のための広告文の校正を賢治に依頼した記録が残っており、それに対し、賢治は田畑に肥料として使用した場合の効果を指導したり、土壌の酸性化原因などをわかりやすく解説する書簡を東蔵に返信している。その例として旧来“石灰岩抹”などと称していた商品名呼称を肥料用“炭酸石灰”と改め、統一して販売することを提案している。このようなやり取りの中で、賢治は自分の新たなる活躍の場を見つけたような思いを抱いていたようだ。昭和５年の春に花巻農学校時代の教え子である沢里武治に、農業の理想論を説いていた自分が傲慢な態度になっていたと自らの身を恥じ、自らの『あらたなるよきみち』を模索していると書いている。そして昭和５年の９月に賢治は初めて東北砕石工場を訪問しています。残念なことに当日東蔵は不在でしが、工場の人にいろいろな案内や説明を受け、苦労話なども聞いて花巻に戻っている、翌日には東蔵に手紙を送っており、その中には“工場の拡大やそれに必要となる資金についての言及”があり賢治の積極的な姿勢が見て取れる。また、案内をした人への御礼の手紙も添えられてあった。その後昭和６年を迎え、宮沢家と東蔵の間で具体的に賢治が働くことに関して話し合いがもたれた。この中で賢治の父政次郎が大きな役割を果たしている。賢治を東北砕石工場の技師として任命すること。また工場への支度金として宮沢家から500円を貸与すること、そして花巻で東北砕石工場花巻出張所を開設して業務にあたることなどが決定した。又、この際に花巻出張所は賢治の弟清六が開業した宮沢商会（金物店）内に設け、末妹クニの夫である主計（かずえ）が経理を引き受け、賢治への負荷の低減策を講じるなど支援を行っている。この契約が締結したのは昭和６年２月21日のことである。この時賢治は盛岡高等農林学校時代の恩師関教授に、学んだことを活かし、東北砕石工場で石灰を活用した土壌改善を行うことを相談する書簡を送っている。これに対し関教授は返信はがきの「引き受けてよからん／引き受けるべからず」の「引き受けるべからず」を棒線で抹消したうえ「小生の宿年の希望が実現しかゝったのを喜びます」と付記してあった。

東北砕石工場外観

6. 技師として奔走した宮沢賢治

昭和６年２月の契約後、賢治は積極的に岩手県内をはじめとする営業活動に当たっている。その猛烈な仕事ぶりは父政次郎も予想できなかったほどだったようだ。もともと技師として契約した賢治がなぜセールスマンとしての仕事に奔走したのか?という疑問を呈する方が多いのも事実だ。周囲の思惑とは別に賢治自身はひとえに工場経

営の安定をめざし、みんなの幸せを求めていたことは明らかだ。その当時持ち歩いていた「王冠印手帳」には、次から次へと発生する仕事を自分のやり方でこなしていった記録が残っている。春の農作業に合わせる形でタイミングよく的確な対応を取る必要があったためだった。尚、宮沢賢治の書簡約500通の記録が残る中で東蔵への書簡が117通と最も多く、一日に2通の書簡を送るなど、こまめに情報交換をしていたことがうかがえる。「王冠印手帳」には仕事に係ることの他にその当時の賢治の心境を伝える記録も多く残っており、仕事を開始した直後の2月末には『あらたなる　よきみちを得しということは　たゞあらたなるなやみのみちを得しというふのみ　・・』と書いている。新たな仕事に立ち向かう決意をして仕事を始めた賢治にとってセールスマンという仕事は海千山千の商売人とのやり取りは簡単ではなかったことが容易に想像される。また忙しい仕事にたくましい工員と比べてひ弱な自分自身の身体・体力がついていけないという目の前の現実を感じたということも考えられる。

それから1カ月後の3月末には“ひとはかとなく　・・”という下書稿があり、前半はセールスに苦しむ自分の姿が描かれ、後半では工場で働く工員たちへの思いやそれに対する自分の心情を情景描写に合わせている。この間約7カ月の間に50回以上の出張をこなし、賢治自ら執筆し、念入りに校正した宣伝書「肥料用炭酸石灰」を岩手県、宮城県、秋田県、青森県の農業関係者に1カ月に5,000通を送っている。またその費用を自ら負担する申し出を行っている。このあたりに炭酸石灰を農民に使ってもらうことが自分の使命・課題であるとの思いを抱いていた賢治がうかがい知れる。このような営業活動の成果として10トンの生産量が25トンと大幅に増えた。工場のために、工員のために、農民のためにと懸命に働いた賢治の姿が浮かぶ。

7. 宮沢賢治と工員たちのふれあい

宮沢賢治が使命感を抱いて仕事に奔走した大きな理由に工場で働く工員の方々との関係があげられる。宮沢賢治は技師就任後7回東北砕石工場を訪ねた記録が残っているがその都度、お土産を持参し、作業を手伝い、話に加わり親密な関係を築き上げていったようだ。3月26日に工場を訪ねた時には工員の皆さんにタオルなどを土産として持参し、工員の皆さんと記念写真を撮っていますがその工員の首には賢治の持参したタオルが巻かれています。

昭和6年3月26日　東北砕石工場にて

又、賢治の人柄を慕い、尊敬のまなざしで賢治を迎え、お土産をもらって喜び、話をしては自慢する工員たちの姿が記録されている。

その当時俵詰めの名人と言われ、雨ニモマケズのデクノボーのモデルとも言われている畠山八之助とのやり取り、触れ合いは、八之助の娘のモトさんが以下のように話している。

賢治は作業現場で八之助さんの作業を手伝ったことがあり（その時賢治が登った工場内の階段は“賢治の階段”と呼ばれている）俵を縄で荷造りする作業を手伝ったがなかなかうまくいかず“賢治さんが手伝ってくれたがうまくいかなくてかえって足手まといになった。”などと楽しげに自慢していた。その後当日休みであった八之助の家を

賢治は歩いて訪ねたことがあった。この時極貧生活のため、砂鉄川沿いのがっけぷちの小さな家に住み、女学校に合格しながらも通うことが出来なかった娘を“かわいそうな娘ですが、私にとっては金のべごっこ（牛）みたいに大事な娘でがんす”といった八之助に“そんな境遇にも負けないで、素直に育っておられますね”と賢治に言われて私は恥ずかしかったことを覚えています。

又、工員と東蔵の関係についても一言ふれますが、のちに東蔵の長男・實が東京商科大学（後の一橋大）に合格した折に、経済面で苦しい状況を知っている工員たちが「私たちの賃金は後でいいから入学資金にしてほしい」と申し出、「入学せんとするものも涙あり、入学せしめんと焦る親となって涙ならざるを得なかった」と書いている。この鈴木實はその後教育者となり、岩手県の各地で活躍し、東山と賢治を語るうえで欠くことの出来ない人材として活躍されることとなる。

賢治は東北砕石工場でひどい扱いを受けて体をこわした・・とする考えがありましたが、弟の宮沢清六さんは後年、「兄賢治は自ら進んで東北砕石工場に行ったのです。その結果があのようになっても、それはそれで仕方なかったことです」「東蔵さんも工員おひとりおひとりも、実に良い人たちでした」と語っています。賢治の東北砕石工場技師時代はまさにそういう時代であったのです。

このような人間関係を知ると、羅須地人協会で農民のためと思いながら、なかなか自分の立ち位置を描けなかった賢治が東山・東北砕石工場という場所を得て、自分を本当に必要としてくれる人たちや貧しいながらも明るく積極的に支えあう工員や東蔵の姿に、自分こそがこの人たちを支えよう、そのために強く生きようと考えたことは想像に難くない。私自身はこのような賢治自身の体験や周囲の人たちが“雨ニモマケズ”を作り上げたと感じている。

8. 賢治倒れる

農業用の石灰販売が春先にひと段落すると、石灰需要は大幅に落ち込んだ。賢治は農業以外の石灰の用途を検討した中で、石灰と地元の石を使用した建築材料（壁材）にその活路を見出すべく、重いサンプルを抱えて、営業活動に回った。その重さは20ｋｇ以上でそれをトランクに入れ各地を回った。昭和6年9月11日からの5日間盛岡で開催された「岩手県主催の肥料展覧会」に工場製品の展示と案内に賢治は全力をかけた。しかし開催前後の日も含めた7日間のうち賢治の出張メモは4日しかなく、3日間は疲労困憊で実際は出向けなかったのではと考えられている。賢治の身体は疲労の極に達していたことがうかがえる。このような状態にもかかわらず19日には仙台に出かけ、その後21日には東京の旅館（神田八幡館）で発熱し、自らの死を覚悟し両親、弟妹宛に遺書を書いている。数日後、家に電話をかけた賢治に父政次郎はすぐに花巻に戻るように話し、知人の助けを受けて27日夜に寝台車に乗り東京を離れた。28日朝に花巻に到着した賢治を弟の清六が迎え、その後約2年間の闘病生活を送ることになる。

この2年間病中の賢治が送った書簡数が100通近くあるが、そのうち30通が東蔵宛であり、もうセールスに出かけられる状況にはなかったが、心には東北砕石工場の工員や東蔵があり、そのことを気にかけ最後まで技師として努めようとしたのだ。それほどまでに賢治が東北砕石工場の仕事に打ち込んでいた事実は後年、東山の人たちを動かすこととなった。

9.『雨ニモマケズ』と『グスコーブドリの伝記』

賢治が病床にあった間に発表された作品に『グスコーブドリの伝記』がある。技師と

しての仕事に倒れた半年後の昭和７年３月が発表された。この作品のあらすじは以下のとおりである。

冷害による飢饉で両親を失い、一家離散した少年ブドリが森や農家で働きながらクーボー大博士に出会い学問の道に入り技師となる。そんなブドリが再び深刻な冷害に襲われたイーハトーブを救おうと火山を爆発させて大量の炭酸ガスを放出させ、その温室効果でイーハトーブを温めようとする。しかしながらその実現のためには最後の１名が犠牲にならねばいけなかった。止めようとする周囲の人間を説得し、自らの命を捧げてイーハトーブとそこに住む人たちを救ったという作品である。

その中で賢治はブドリの言葉として次のように書いている「私のやうなものは、これから沢山でてきます。私よりもつともつと何でもできる人が、私よりもつと立派にもつと美しく、仕事をしたり笑つたりしていくのですから。」この中に登場するクーボー大博士は盛岡高等農林学校時代の恩人である関教授がモデルと言われ、名声を求めず、ひたすら世の中のため・農民のためを考えた姿がそこに反映されている。ブドリの言葉を通じて関教授や賢治自身の考えが、次世代の人に必ずや受け継がれると望み、信じていると表現したものである。

又、有名な『雨ニモマケズ』は賢治の死後、トランクのポケットから発見された一冊の黒革装手帳に書かれてあったものである。その手帳は発病した昭和６年秋から翌年の初めまで使用されていたようだ。そこに11月３日と記述された『雨ニモマケズ』が発見された。これ自体は世間に発表を前提に書いたものではなく、賢治が自分自身に書いたメモのようなものだと考えられている。

現在に至るまで多くの日本人が困難な状態に置かれた時に思わず声にだしてしまうこの『雨ニモマケズ』は本当にどこを切り取っても、人々の心を打つ内容を含んでいる。【アラユルコトヲ　ジブンヲカンジョウニ入レズニ】という心境。

また【ミンナニデクノボートヨバレ　ホメラレモセズ　クニモサレズ　サウイウモノニ　ワタシハナリタイ】の部分についてはデクノボーとは何か？モデルはいるのか？といった論議がされてきているが、技師として働いた東北砕石工場の人々とのやりとりが反映されていることは間違いない。先に紹介した畠山八之助のように貧しさや苦しさに負けず、明るく家族のことを思い、賢治を慕った工員や、工員のために全財産をなげうって経営に当たった東蔵等がいつも賢治の心にあったことは間違いないはずだ。

尚、鈴木實氏は校長を務めた３つの高校でそれぞれ宮沢賢治の詩碑を建立しているが、決して自分自身の名前を表に出さなかった。賢治の精神を次世代のこどもたちにというもので、その生涯に宮沢賢治と同じ様に自分を勘定に入れない崇高な精神があると私は想っている。

10. グスコーブドリの町　東山

戦後、ここ東山において鈴木東蔵の長男、鈴木實氏は故郷に戻り長坂村の青年団の若者たちとこれからの村づくりの議論を交わしていた。その中で賢治の精神を知った若者たちが、今後の村づくりの象徴に賢治の詩碑を建立しようと立ち上がった。

昭和22年春に宮沢家から紹介され、東京の国立博物館次長で宮沢賢治作品を世に紹介していた谷川徹三氏を訪ね、詩碑の撰文・揮毫を依頼し、快諾を得た。谷川徹三氏は農民芸術概論綱要の農民芸術の綜合から『まづもろともに　かがやく宇宙の微塵となりて　無方の空にちらばらう』を選び、その揮毫のために約１年の月日を要した。

その揮毫の様子は息子で詩人でもある谷川俊太郎氏によると「父は何度も書き直していましたが、父の大きな墨の字の書が部屋いっぱいに並んでおり、それを見て胸がいっ

ぱいになったというのが、一番大きな記憶です。」と述べている。

この詩碑建立は、費用捻出のため様々な活動をした青年団の様子や、詩碑の基礎作りのため中学生たちが砂利をバケツで運んだなど多くの逸話が残っている。落成式が行われた昭和 23 年 12 月 10 日は谷川徹三氏や宮沢清六氏などが出席し、徹三氏は講演の中で賢治の代表作としてグスコーブドリの伝記をあげられ、ブドリが火山を人工爆発させて自分の身を犠牲にし、冷害を救うことは文字通り宇宙の微塵となって無方の空に散らしたのであり、詩碑の言葉はグスコーブドリの生涯の象徴で、それこそ賢治の生涯であった、と結ばれ、居合わせた方々は深く感銘を受けたと記録が残っている。その詩碑は現在、一関市東山支所隣の新山公園にあり、花巻の『雨ニモマケズ』詩碑に次ぐ、2 番目に古い宮沢賢治詩碑である。その後詩碑建立 50 年事業などが開催され、本年 2017 年 6 月には建立 70 年記念事業として谷川俊太郎氏とその長男で音楽家谷川賢作氏を招待し、記念式典及び詩の朗読とピアノコンサートを開催した。

尚、東北砕石工場はその後昭和 15 年に東北タンカル興業株式会社と名称変更、昭和 31 年には東亜産業株式会社となる。現在は東亜産業株式会社東北支店となっている。東山は東北砕石工場以後多くの会社が石灰やセメントを扱い“石灰の町”となり、昭和 49」年には陸中松川駅から年間 100 万トン以上の貨物を出荷し、岩手県で最大の貨物駅に発展。当時の駅員は 37 名でした。また東蔵は昭和 13 年に東北砕石工場を退職、その後も石材工業所を起こし、砥石材（泥灰岩）や紫雲石（硯石材、スレート材）の採取を行ったり、戦後は大理石採掘などを行い、晩年まで石とかかわりを持ち昭和 36 年にその生涯を閉じている。

平成 6 年に旧東北砕石工場の建物が東亜産業株式会社から旧東山町に寄贈されたこと、第一回宮沢賢治みちのくフォーラム in 東山が開催されたことを契機に東北砕石工場時代の宮沢賢治の生き方や考え方を再度見直すこととなり、平成 7 年 10 月 29 日に「グスコーブドリの町・東山」を宣言した。

賢治の「グスコーブドリの伝記」に出てくるブドリとネリ、それは子供たちの代名詞。未来の東山を担うこどもたちと今を生きるおとなたちがグスコーブドリの生き方に学び文化の香り高い町を創造していこうとするものでした。

旧東北砕石工場入口展示
（現在東北砕石工場は耐震工事のため見学を中止しております。再開は 2019 年春を予定しております。）

11. 石と賢治のミュージアム

「グスコーブドリの町・東山」の宣言後、平成 8 年に旧東北砕石工場が国の登録有形文化財として指定された。これを受け多くの皆様に旧東北砕石工場をご覧いただく体制を築くこと、東山で働いた技師宮沢賢治の心と生き方に触れ、これを次代のこどもたちに語り継ぐことの二つを大きな目的として生まれたのが【石と賢治のミュージアム】です。平成 11 年 4 月に当時の東山町の施設として、メインとなる『太陽と風の家』、陸中松川駅から旧東北砕石工場まで続くトロッコ道とそこに展示されているオブジェが整備された。またその後平成 15 年 7 月に岩手県北上市出身で宇宙物理学者、宮沢賢治研究家、新潟大学名誉教授の当館名誉館長・斎藤文一氏並びに鈴木東蔵の長男・

鈴木實氏から寄贈された8,500冊の図書を収めた双思堂文庫が追加整備された。それと同時に鉱物展示室や化石展示が整備された。

大きな博物館と違い、東山の人たちの思いから出来上がった小さなミュージアムですが全国の賢治ファンの方や鉱物好きの方々、地元の化石に興味のある方、太陽のホールでお子さんを遊ばせるお母さん方等幅広い方々から親しまれている施設です。

最後に今年知り合うことの出来た『石っ子』たちの話をします。今年春から当館の協力研究員をお願いしているSさんは小学生の頃から当館の事業に参加してもらっていました。成人されてその知識と採集してきた鉱物を皆様に見てもらおうと当館鉱物展示室に鉱物と写真を展示する企画や展示説明などをしながら、更に次世代のこどもたちにその魅力を伝えていただいています。また同世代の地元のWさんは幼いころから化石に興味を持ち、現在大学で化石について学んでおり、将来はその分野での活躍が期待されています。またそんな若者たちより更に若い小学生たちが、鉱物展示室で目を輝かせて多くの質問をする姿を見て頼もしさを感じています。片や仙台から来られた男性は50才を過ぎて川原でゴルフスイング練習をしていて、川原に転がっているきれいな石をみて石のとりこになり、石の採集と鑑定依頼のため日本中を歩くようになったとこちらも目を輝かせています。幼い『石っ子』から年配の『石っ子』まで、皆さん宮沢賢治同様にその道をこれからも興味を持って歩んでいくことと思います。

そんな人たちが集う【石と賢治のミュージアム】です。読まれた皆様、岩手・イーハトーブの地にお越しの際は一度訪れて、宮沢賢治の思いにふれてみませんか。

参考文献

伊藤　良治　『宮沢賢治と東北砕石工場の人々』
国文社　2005年

鈴木　實　『宮澤賢治と東山』
熊谷印刷出版部　昭和61年

宮澤　清六　『兄のトランク』
筑摩書房　昭和62年

伊藤　良治　『東北砕石工場技師宮澤賢治』
（『輝く宇宙の微塵』所収）
宮澤賢治学会イーハトーブセンター地方セミナー　平成15年

宮澤賢治イーハトーブ館発行
鈴木東蔵展　2005年

佐藤　竜一　『宮澤賢治　あるサラリーマンの生と死』
集英社新書　2008年

岡村　民夫　『イーハトーブ温泉学』
みすず書房　2008年

石と賢治のミュージアム　太陽と風の家＆鉱物展示室